

ピチェ・クランチェン パブリック・トーク

「Walk」

開催日時：2017年3月28日（火）19：00-20：30

開催場所：森下スタジオ

こんばんは。本日は私のリサーチについてお話します。とてもシンプルなテーマで、「歩く」というテーマです。「歩く」ということを、人生において気にかける人は少ないと思いますが、そのシンプルな動きに着目して、「歩く」ということを見つめ直したいというのがきっかけでした。

そして、「歩く」ということについてリサーチをしたいという申請し、その企画を受け入れてくださったセゾン文化財団にお礼を申し上げたいと思います。このようにレジデンシーの機会を頂き、滞在中の20日間とても興味深い観察をすることができ、とても嬉しく思っています。

「歩く」をテーマとした理由

まず、滞在中に発見したことに関する映像をお見せします。

これは渋谷です。渋谷に来る人は、みんな歩くために渋谷に来ています。路上を歩いて写真を撮って、色々な角度から同じ建物を撮ってみたり、とにかく歩いているという印象でした。数多くの観光客もいました。観光客は人々が歩いている景色を写真に収めています。それはすごく特別だと思いました。早朝から深夜まで人々は歩き続け、写真を撮り続けていました。

なぜこのようなことに興味を持っているかという、歩くという行為は人生に影響があると思っているからです。一つの場所から別の場所に移動するための手段ではなく、歩くということは人生に様々な影響を与えていると思います。ライフスタイルやコミュニケーション、感情など、全て歩くという行為から影響を受けていると思います。

私はこのリサーチをもとにして、これから作品を創作し、フェスティバル/トーキョーで発表する予定です。この作品では、東京の一般の人々を巻き込む作品にしたいと思っていますので、東京でどのように人々が歩いているのかを理解し、作品を作りたいと思っています。

東京の「歩く」の特徴

このリサーチの主な活動は、東京の様々なエリアで人々を観察することでした。東京という一つの都市の中でも、各地域がとてもユニークな特徴を持っていると思います。なので、各地域で人々がどうやって歩いているのかといったパターンや特徴を研究し、それらの地域の違いや類似点を見つけて、分析するということがとても重要となります。そのため、このリサーチのフォーマットは様々な場所と時間帯でデータを集めるということでした。私は池袋と新宿、渋谷、新橋、浅草そして上野という異なる地域で、人々がどのように歩いているのかということを観察しました。

そして、東京の様々な地域で過ごし、観察して、幾つかの結論を得ることができました。例えば、一番早く歩いていた地域は、どこだと思いませんか？それは池袋でした。そして新宿、渋谷、新橋、浅草、上野という順番です。どちらかというと、池袋であったり、新宿、渋谷といった東京の西の方が人々は早いペースで歩いている、浅草、上野、新橋といった東京の東の方が人々はゆっくり歩いていました。そのため、東京は大きく言うと二つのエリアに分けられると思いました。例えば、私から見ると上野や浅草はどちらかというと古い町という印象を持っています。なぜそのエリアの人々がより遅く、ゆったりとしたスピードで歩いているのかということについては後でもう少し詳しくお話ししたいと思います。

また、一日の中でも時間帯によって人々の歩くパターンは異なります。一番、多様な歩くスタイルを発見したのが朝の7時から8時半でした。非常にカオティックな時間帯で、ラッシュアワーと呼ばれている一番忙しい時間です。朝の時間帯は歩いている人もいれば、走っている人もいて、また、すごくゆっくり歩いている人もいました。一方で、夕方の4時や5時ぐらいになるともう少しゆったりとしたペースで歩くようになって、雰囲気もリラックスした感じとなります。仕事が終わって、オフィスを出る時間だ

と思いますが、ただ仕事が終わってゆっくりしているのではなくて、4時から5時というのは日が沈む時間帯です。日はゆっくりと沈みますが、おそらく、身体がその日没の時間とシンクロして、人々はゆっくりと歩いているのではないかと思います。そして、また日が沈んだ5時半以降になると人々は早く歩き始めます。

歩いているときに東京の人は、ずっと前を見ているか、あるいは床をずっと見て歩いていて、基本的に人と目を合わせない、アイコンタクトをしないということを発見しました。ただ自分の進む方向だけを見ているという感じです。また、歩いているという意識がとても低いと思いました。つまり、自意識であったり、自己コントロールがない状態で、「自動」で歩いているという印象です。

それから、東京の人はできるだけ速く歩くために、重心を自分の体の前に置いて歩いています。前に重心を置き、前屈みになっていますが、それは早く歩くためだと思います。それから、なぜ、前かがみになるのかを考えました。もしかしたら間違っているかもしれませんが、人々はいつも階段を使っていることが関係するのではないかと思います。例えば、地下鉄に乗るときです。地下に降りるために階段を下りますが、私も東京で地下鉄を利用し、活動を2週間続けていたので、自分の体も段々そうなってきた気がします。

東京の人が早く歩く理由

それでは、なぜ、東京の人が早く歩くかということですが、まず、生存と存在が関係していると思います。一生懸命仕事をする、そのために脳を使うため、脳がどんどん熱くなります。脳の温度が上がっていくと、ストレスを感じ始めます。そのストレスを軽減するためには脳の温度を下げなければいけないのですが、そのために人々は早く歩いている。言い換えると、身体の体温を調整して脳の体温を下げ、そのことによってストレスを軽減するというをしているわけです。脳の温度を下げるには、実は歩くしかありません。ずっと机に向かって考え事をしていたり、仕事をしていたり、作業をしていたりすると段々と脳が熱くなっていて、外に出たいと思うようになるのではないのでしょうか。

それから、建物の高さが関係していると思います。これは人間の本能であったり、恐れや不安の感情と関わることだと思いますが、建物の高さが空間を抑圧し、空間を窮屈で狭苦しく、居心地が悪いものと感じさせていると思います。自分の周りの空間が狭くても、自分の頭の上に広い空が広がっていれば、リラックスできると思いますが、その空間が高い建物に囲まれていたとしたら、それはすごく居心地の悪いことで、その居心地の悪さから逃げるために人々は早く歩くと思います。新宿と上野を比較した場合、新宿には高層ビルが多く、上野はとても古い町で、建物もとても低いのですが、やはり、歩き方も違いました。

それから、疎外感と分断として、建物の素材が関係すると思います。東京の多くの建物はコンクリートと鏡を素材としています。コンクリートや鏡はとてもきらきらしていて、反射する効果がありますが、それらを素材とした建物に囲まれた道を歩くと、自分の影や反射している像が常に自分の速度と同じスピードで移動するという状況がつけられます。

そのような状況で歩くと、何らかの存在につけられているという気持ちや、誰かが見られている、または、誰かと競争しているという気持ちになるかもしれません。そのような感情になると、脳は身体にもっと速く歩くように指令を出します。生まれつきかもしれませんが、私はこのような影響をよく受けません。

私自身もこのような状況で歩いていると、何かにつけられている気がします。つまり、一人で歩いていたとしても、建物の素材の影響で、自分以外のリズムがあるのを感じます。例えば、歩いていてその道の両側に建物があり、自分像が反射して両側にあるとしたら、両方に自分と別のリズムがあるのを感じます。自分がもうちょっと速く歩いたら影はついてくるのか、遅くなったらどうなるのかといった遊びしてしまうこともあります。東京には、このような状況が地下も含めて、あらゆる場所にあり、無意識のうちに、私たちの身体はとても大きな影響を受けていると思います。

次に、メディアやテクノロジーの影響、特に現代という時代性と広告という観点からお話したいと思います。東京はとても現代的な都市ですが、そこで人々がどのような装いをしているかということ、それは広告によるファッションに影響を受けていると思います。そのファッションであったり、色々な商品

の広告の映像が観光スポットや駅などで流れていますが、そういった広告は消費者を促すためにとっても速いペースで作られています。そのことによって、現実の時間性や、現実の生活感というものが段々消えていきます。広告に溢れた環境で生活をしている東京の人は、その広告にある行動を真似していくこととなり、そのことによって、現実の時間であったり、あるいは真実といったものを気にしない、または全く関係のない態度で、新しい行動パターンを作ります。

もう少し説明しますが。私たちは本当に広告やエンターテインメントに囲まれて生活しています。それらの広告やエンターテインメントは全て編集された結果としてそこに存在しますが、一つの広告でその商品の全てが分かるように、数多くの要素が短い時間の中に詰め込まれています。そういったものに日々晒されていると、私たちの脳は現実の時間の感覚っていうのを忘れていくと思います。思考も同じようにメディアのようになっていくと思います。例えば、映画を観ていて、銃で銃殺されて倒れるというシーンがあり、その10分後にはその人は生き返って歩き回っているといったことがあると思います。あるいはテレビの料理番組で、魚を切って捌いて、その次の瞬間にはもう料理ができています。そして、それを信じてしまうわけです。そういったことに私たちの脳は影響を受けて、そして私たちの思考もそれに影響されています。行為よりも結果に脳も思考も集中するようになり、結果として歩くということについても、目的地に考えが集中し、そこに至るまでのプロセスを考えなくなる。

東京の空間には限りがあると思いますが。地下で過ごしている影響も考えられます。東京は、世界で唯一、地下で生活できる都市だと思います。東京の人は、一生を、必要があればですが、地下で過ごすことができると思います。というのも、生きるために必要なものが全てが地下に揃っているからです。しかし、地下は、他人と一番近い距離で空間を共有しなければいけないエリアだと思います。一平方メートルなどで、他のエリアとの人数を比較してみると、一番居心地の悪い、一番狭い場所が地下だと思います。

人は誰も空間と自由を必要としますが、地下は空間が限られていて他人と一緒に空間をシェアしなければならず、あまり動き回るような自由もないので、居心地が悪く感じます。結果として人は地上に戻った時に、身体に自由を与え、また動けるんだということを感じさせるために速く歩くのではないのでしょうか。私の人生においても、このように日中の長い時間を地下で過ごすというのは初めての経験でした。地下鉄から降りると、できるだけ早く出口を見つけて、地上に出たいと思い、歩きが早くなりました。それは身体が自由を求めているからでした。

最後に、日本という国の全体を表す原則、原理だと思いますが、できるだけ時間を節約してなるべく早く終わらせたい、終わらせるべきだという考え方があると思います。これが本当に日本を表す概念ではないかと思いますが、全てが時間を節約するために作られていると感じました。

この写真がいい例だと思うんですが、コンビニのおにぎりは日本だけですよ。開け方が書いてありますが、開けたらすぐ食べられる。ぱっと開けてぱっと食べられる。こういった商品は、おそらく日本以外では見つけられないのではないのでしょうか。そのようにできるだけ早く物事を済ませると、時間が節約できたということになるわけです。新幹線を作って、できるだけ速く移動して、もっと時間を節約して、もっと時間を作る。また、飲み物の自動販売機も同じです。自動販売機は街中にありますが、お金を入れたらすぐに飲み物が手に入ります。本当にそれは日本という国を表す原則なのではないかと思います。そうやって時間を節約して、その節約した時間でもっと色々なことをする。そして、それはもちろん歩き方にも影響を与えています。速く歩いたら時間を節約できる。そしてその時間を使うことができるというように。

今後の作品の構想について

このような観察をして、そこから得た情報を分析して、それらの素材をもとに作品のフォーマットを作り始めていますが、それらのサンプルをシェアしたいと思います。

まず、パフォーマンスのステージ案です。ステージ上に6つのエリアがあり、そのエリアがお話していた異なるスペースを表しています。真ん中にあるのが地下鉄の大江戸線で、大江戸線に乗れば東京中の色んなところに行くことができます。東京の東西南北、どこへでも大江戸線さえ乗れば行けるので、私にとっては東京の中心ということになります。

それから、衣裳の案もお話します。衣裳も東京の異なる地域、エリアを表しています。右側が渋谷で、若い世代を表すゲームやファッションなどをモチーフになっています。新橋は築地の魚市場からインスパイアされています。

東京の各地域のエッセンスを理解することができたら、その地域毎の動きを作っていけるのではないかと考えています。それはダンサーの歩くリズムでもあり、音楽や照明にも応用できる可能性があるかもしれません。

私はレジデンシーの期間中にオーディションを行いました。オーディションには58名の方が参加して下さい、とても興味深い体験でした。今回のオーディションで16名のダンサーを選び、それから、タイやインドネシア、カンボジア、香港の振付家を呼びたいと考えています。

(以下、質疑応答略)